



STEP 3 水の道と炭鉱



水道の始まりは炭鉱の専用水道

明治42（1909）年、市水道事業が始まるよりも50年ほど前に、三池炭鉱専用水道（社水）が創設されました。専用水道は炭鉱会社や炭鉱で働く人たちが住む社宅などに布設。炭鉱周辺の一般家庭にも専用水道が普及していたため、市域の15%に給水された。全国的にも大規模なものでした。他にも大牟田市と旧陸軍造兵廠（兵器工場）が布設した若干の水道が存在しました。炭鉱のまち・荒尾なら



▲万田宅（昭和14年）



荒尾市の水道事業

昭和28（1953）年、市民の保健衛生の向上、消防や商工業発展のため、荒尾市は水道事業の開始を決定します。4年間の準備期間を経て、昭和32（1957）年、水道事業を開始しました。当時は給水人口2万人、一日最大給水量4百万ℓでした。

ではの独自の水の歴史といえます。一方、専用水道のない一般の家庭は井戸水を使っていた。滅菌処理をしていない水のため、赤痢などの集団発生を引き起こす危険もありました。



二つの水道

荒尾市には市が供給する「市水」と三池炭鉱専用水道の「社水」という二つの水道が存在しました。社水は市水よりも早く給水を開始していたため、全市民を対象とする消防や水道行政を行うのに、さまざまな不均衡が生じていました。その解決策として、水道一元化は長年の課題でした。国・県・地元関係者が半世

給水区域を広げるなど6次にわたる拡張事業を実施。現在では給水人口5万4千人、一日最大給水量2千240万ℓにまで事業を拡大しています。

紀にわたり一元化の協議が続けてきましたが、なかなか進展しませんでした。しかし、平成9（1997）年の三井三池炭鉱閉山をきっかけに国庫補助を受けられるようになり、一気に一元化に弾みがつきました。そして、新たな水源を確保するため、平成24（2012）年、ありあけ浄水場を建設。関係機関の頑張りもあり、ことし4月、水道の完全一元化が実現しました。これにより、社水は百年にわたる役目を終えました。これから5年かけておよそ千6百世帯の切替工事を行います。この工事が完了することで、荒尾市の炭鉱閉山に伴う水道関連事業も遂に終わりを迎えることとなります。

Interview



万田坑ステーション
しんどうけんすげ
施設長 進藤健介（昭和24年生まれ）

父が炭鉱マンだったので、緑ヶ丘にある社宅で生まれ育ちました。自宅の流し台に小さな蛇口があり、そこで顔を洗ったりしていました。食事の準備や洗濯などには4～5軒共同で外にある大きな水道を使っていました。風呂は500～千世帯ほどで共同だったので、みんなと裸の付き合いができて楽しかったです。当時、社宅では水道代も電気代も無料だったので、節水や節電の意識はほとんどありませんでしたが、今は水も電気も大切に使っています。

WATER PICK UP

水道一元化工事を行います



配水管の布設工事

社水を市水へ一本化する水道一元化を実施します。暫定的に社水の施設を使用して市水を給水しますが、5年間かけて順次、市の配水管から給水するための工事を行っていきます。工事中は、通行規制などご迷惑をお掛けしますが、ご理解をお願いします。

- 平成26年度工事予定地区
下井手・本井手・万田方面
- 工事内容
道路上にある市水道本管から各家庭の水道管との接続工事

今まででもこれからも

水の道は続いていく

ありあけ浄水場で作られた水はこの鉄道敷（大牟田市臼井新町）の下にある配管を通過して、荒尾市の中央配水区に送られます。かつては鉄道敷の上を石炭や炭鉱関係者を運ぶ炭鉱電車が通っていました。

私たちは自然の中で循環している水を使って生活しています。上水道は安心・安全な水を家庭に送り、下水道は家庭や工場で汚れた水をきれいに海に返しています。

今までも、私たちが享受してきたように、これからも命の水を未来に残すため、きれいな水と自然を守っていく必要があります。

地球にある水のうち0.8%しか私たちは飲むことができません。水は私たちの生活になくてはならない命の源です。その恩恵を与えてくれる小岱山に抱かれて、自然豊かな環境で暮らすことができる喜びや誇りを次の世代に伝えていくことはとても大切なことではないでしょうか。

水道事業はみんなの支え合いで成り立っています。期限内に水道料金を納めるなど水道事業へのご理解もよろしく願います。

次号では低コストで環境に優しい取り組みなどを行う荒尾市の下水道事業について考えます。お楽しみに！